

課題演習 D D 「海洋による熱輸送の評価」

担当：根田昌典

地球にもたらされる外部エネルギーは太陽の放射エネルギーだけであり、これが地球の気圏水圏の大規模な流体運動のエネルギー源であるといっているでしょう。一般に地表面に達する太陽エネルギー密度は低緯度域で大きく高緯度域で小さいですが、公転面と地軸の傾きによりその分布は季節的に変動します。このような直接的なエネルギーインプットに対して、気圏水圏の運動を通じてエネルギーの再分配が行われ、最終的には大気からの放射エネルギーとして地球外に放出されることになります。

このようなエネルギーバランスは局所的には成立していません(図1参照)。熱エネルギーの再配分過程において、大気と海洋の両方がそれぞれの程度の役割を担っているのかを評価することは地球の温度分布の維持変動機構を明らかにするために重要な問題です。東西に平均的な構造を仮定すれば、大気や海洋の子午面循環による南北熱輸送に帰着させることができます。しかし、西岸境界流の変動要因や海洋のベイスンスケールの水温構造の変動要素に関する知見は現在においてさえ十分ではなく、東西に不均一な構造に起因する東西循環の影響も無視することはできません。海洋による南北熱輸送は全輸送量の3分の1程度といわれていますが、近年大西洋の南北熱輸送(子午面循環)が弱まっているという報告もあるなど、南北熱輸送量とその変動量の評価は今でも気候研究の最重要課題のひとつです(図2)。

本演習では、全世界の海洋研究機関が協力して実施した観測キャンペーンである WOCE (World Ocean Circulation Experiment)の海洋観測データ(図3)を用いて海洋の地衡流計算を行い、エクマン輸送量とあわせて大洋の南北熱輸送量を求めることを基本的な作業内容とします。これを順圧的な輸送量と傾圧的な輸送量の和(と渦変動成分)と考えれば以下の式のように求めることができます。

$$Q = \rho C_p \langle \bar{v} \rangle \langle \bar{\theta} \rangle \int L(z) dz + \int \rho C_p \langle v \rangle \langle \theta \rangle L(z) dz + \int dz \int \rho C_p v' \theta' dx$$

この演習を通じて、気圏水圏における熱エネルギーの再配分過程の中で海洋の果たす役割について評価してみようと思っています。最初は、計算の根拠となる古典的な論文を輪読形式で勉強することと並



図3：太平洋におけるWOCE集中観測線(赤い線)の分布

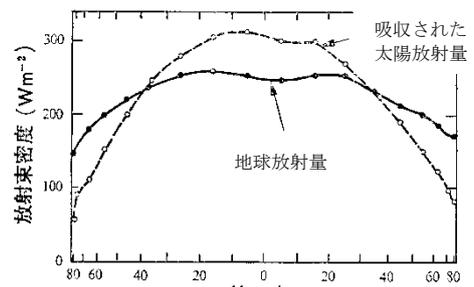


図1：会田「大気と放射過程」より、緯度ごとの放射収支

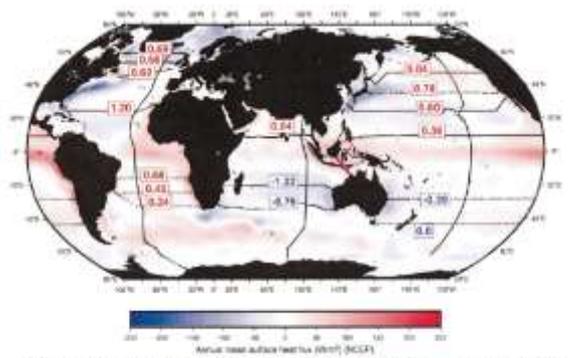


図2：各大洋における南北熱輸送量の推定の例、単位はPW (10の15乗ワット) Talley et al.(2003)より

行して、共通の課題として太平洋北緯24度線に沿った P03 観測線のデータの解析を各自で行います。共通課題の完了後は、大洋間の輸送量の違いを検討したり、海上風データから求められるスベルドラップ輸送量との比較を行ったり、輸送量評価の方法をいくつか試してみたりと調べてみたいことはたくさんあります。地衡流計算をするためにDBで得た知識を用いますが、難しい理論や特殊な解析手法は使いません。最初は、データの解析とともに基礎となる論文の輪読を並行して行います。自分なりの解析に使う時間を多くとるために、解析のためのサンプルプログラムを予め用意してあります。